

The impact of tramadol and dihydrocodeine treatment on quality of life of patients with cancer pain

W. Leppert、M. Majkowicz

The International Journal of CLINICAL PRACTICE,
November 2010;Vol.64(12): 1681-1687

<背景>

Tramadol と dihydrocodeine(DHC)は WHO 疼痛ラダーの第二段階で用いられる薬物である。

両薬剤の治療が痛みのあるがん患者における quality of life(QL)と performance status(PS)にどのように影響を及ぼすか評価する。

また、これまで tramadol と DHC の同等の鎮痛効果をもたらす用量を検討する。

これまでの検討で 経口モルヒネ 10mg = tramadol 100mg
 経口モルヒネ 10mg = DHC 60mg という研究結果がある。

<方法・対象>

Cross-over study (1 施設の緩和ケア病棟、2007 年 1 月～2008 年 6 月)

各群 15 名

- ① Tramadol 7 日間 ⇒ DHC 7 日間
- ② DHC 7 日間 ⇒ tramadol 7 日間

NSAID アセトアミノフェン内服にもかかわらず VAS > 40 の侵害受容性疼痛の患者

Tramadol 200mg/day、DHC 120mg/day から開始(NSAIDs 等は継続)

VAS < 40、もしくは最初から VAS 20 以上の減少が満たされるまで漸増 (table 1)

7 日目 (薬剤変更の直前) 14 日目に評価

QL (EORTC QLQ C 30) PS (Eastern Cooperative Oncology Group, Karnofsky)

☆予防的な制吐剤、下剤の投与はしない

<結果>

薬剤使用量 (7 日目、14 日目)

Tramadol	286.67±157.35mg	256.20±109.33mg
DHC	138.87±40.77mg	172.53±95.19mg

VAS 値(table 2)

10 日目、11 日目の 2 日間を除いて DHC の鎮痛効果は tramadol よりも優れている

QL (table 3, functional scale)

Tramadol で優れていたもの emotional functioning

DHC で優れていたもの global QL, cognitive functioning

QL (table 4, symptom scale)

Tramadol で優れていたもの 便秘↓

DHC で優れていたもの 倦怠感・痛み・睡眠障害・嘔気・嘔吐↓ 食欲↑

PS (table 5, 6) 両群で差なし

<考察>

今回明らかに DHC 群で鎮痛効果高

⇒ローテーションする場合には tramadol : DHC 5:3 の換算比?

QL の症状に関して

Tramadol 群で嘔気 (セロトニン↑によると考えられる) ⇒ 予防的な制吐剤投与

DHC 群で便秘 (強い μ 親和性によると考えられる) ⇒ 下剤の投与が考慮されるべき

Limitation

- ① 各薬剤 7 日間のみでの使用で短い
- ② 薬剤切り替え時に休薬期間なし
- ③ 神経障害性疼痛に関しては言及なし
- ④ 母集団が小さい